

---

# 1 工程@1円～知的障害者の労働現場

## 31： 施設というコミュニティ

千葉 晃央

---

「施設は一種のコミュニティやね」。大先輩が言った言葉である。コミュニティとは「同士・同志の集団」「共同体」「目的を共有している仲間」の事である。さらにコミュニティとは「同じ共通点を持った人間の集まり」「生活を共有している動物達」の事を指すといわれている。

労働現場は人が集い、作業をしながら、毎日過ごすというのが日々行われている。職員として過ごす者は、施設全体の運営を担う。それは利用者の方への支援を中心とする。利用者支援の記録を残す、ケースに関連した他機関とのやり取り、ケースのご家族とのやり取り、施設と他施設、施設と地域社会とのやり取り、これらも職員として過ごすものは担う。一方、利用者さんは作業をし、日々の日中活動の中心となる時間を過ごす。そこでは仲間もいるし、作業や生活のサポートをするスタッフもいる。制度という背景を取り除き、日々実態として施設では何が行われているかだけを切り取るならば、このようなことになるだろう。

では、その人が集まってできた集団であるコミュニティとは、どのようなものだろうか。コミュニティを一つのシステムとし

てとらえるならば、下位のシステムがおのずと存在する。つまりサブシステムやマイクロシステムといわれるものを今回は取り上げてみたい。

その下位のシステムは、ある場面や時期や時間で浮き上がることも際立つこともある。またその逆もある。何を共通にしたサブシステムが浮き上がってくるか、表層に現れるか。中には表層ではなく、低層で存在し続ける下位システムもあるだろう。そんな視点から、知的障害者の労働現場というコミュニティを考えてみたい。

### 利用開始時期が同じ！サブシステム

その施設の開所時には一度に利用を数十人が開始することになる。真新しい施設、新しい職員と利用者が一堂に会し、スタートする経験は、他の何物にも代えることができない印象深い経験となる。試行錯誤も失敗も、苦労も、初めてのお給料も、初めての仕事の喜びも共有する。そして、たくさんの写真も残る。その時期を一緒に乗り切った仲間の絆は強い。そして、施設のそ

ういう時期に立ち会う経験は人生において多くはない。そういう機会に巡り合えたならば、自分の人生の貴重な経験にもなるだろう。これは援助者も利用者もある程度共通ではなかろうか。「あのころから一緒に頑張っているね」「あの頃、はじめは何もなく大変やったよね」こんな話ができる人がいるならば、そのことがすでに支えになる。

また、似たものとして施設の定員が増えたときも一定数の人数が一度に誕生する。このつながりも、施設にとっての定員増や増築という記憶とも相まって、後年も話題になることが多い。定員によって、制度からの予算のつき方は大きく変わることもある。それによって運営側の事情は大きく影響を受ける。職員配置の変更などである。その時期を共にした援助者、利用者の記憶も鮮明に残りやすい。

こうした一度に多くの利用者さんが新たに通うことになると、人間関係の構築も一度に並行でスタートとなる。そのため、一人ひとりとのラポールを形成するプロセスが同時進行となる。時には、うん十人同時にである。その苦労やリスクはなかなかである。お互いに知らないところからのスタートである。職員同士も、職員と利用者さんの間も、利用者さん同士もである。そこに道を見つけていく仕事になる。その経験はやはり鮮烈なものとして残ることになる。

### 時代を共有！世代によるサブシステム

美空ひばりの話で盛り上がる世代。万博、フォークソングの話で盛り上がる世代。おニャン子クラブ、80年代アイドルブームで



盛り上がる世代。西野カナ、KARAの話で盛り上がり、一緒にコンサート行く世代。私の周辺では、上記のように本当に大きく4世代に見えている。この見え方はかなり個人的な見解であろう(笑)。有名人の訃報のニュース、昨夜のミュージックステーションのパフォーマンスの話題でこのサブシステムは集まりコミュニケーションをとる。

福祉制度は、時代の経過の中で整ってきた。その経験の差も存在する。福祉制度がない時代、障害児を対象にした義務教育がスタートした世代、福祉利用が権利になった時代、洗練された福祉サービスを選ぶ時代…。その世代ごとに施設の利用姿勢が異なる。これらは表層に現れるよりも低層に流れている。何かの非日常的な場面で浮き彫りになる。

世代によっては、土曜日も働いていた頃を振り返った話題もある。土曜日のお昼の食事は軽食も多く、ラーメン、焼きそば、うどん…などだったね！などから始まり、半日働いて、出かけた話、職員も残って少し片づけものをしたり、レクリエーション的に職員同士の親睦を深めた話をすることも多い。土曜日がそんな機能を持っていることも多かった。

援助者にとっても、自分が子ども時代に過ごした障害を持った友人と重ねることもある。また、ご家族も自身の子どものと同じ年の援助者は何かを重ねることもあるように感じたこともあった。また、援助者が自分の子どもより、若くなっていくこともご家族としては感じ入ることが多い場面のように思う。同じ世代の利用者さんのご家族と話していると、そんな話題にもなることがある。

## 朝がはやい人たちのサブシステム

はやい時間帯の施設現場は閑散としている。昼間は多くの人がいる建物も、早い時間帯は静寂に包まれている。スズメの声が聞こえ、夏はまだ涼しく、冬はまだまだ寒い。そんななかでも早く施設に足を運ぶ方々がいる。

職員は管理職クラスの方もいる。責任者としてカギを開ける。鍵を開ける前は不審者侵入の有無を確認するため、施設を1周し、ガラスが割れていないか、中に人がいないか、普段と違う様子がないかを確認することも多いと聞く。そうこうしていると職員も、利用者さんも早く来る方がぼつりぼつりと到着する。何かしらの作業をはやく来て、やりたい、済ませたい人も多い。その役割、当番を担っている人も、そうではなく自主的な人もおられる。洗濯物、掃除、作業準備、水やりなど、人によってさまざまである。

この時間帯は双方に余裕がある。立ち話などコミュニケーションはゆったりとできる。リラックスもしている。早起き仲間である。昨日のプロ野球の話題、相撲の勝敗の話題、家族の話題、仕事の話題、友達との関係の話題…そういったやり取りがゆったりとした時間の中で行われる。

最近「朝活」という言葉もあるが、朝の比較的余裕がある時間に職員は管理職との事前打ち合わせ、形式的ではない相談をすることも多い。またそれが有効に機能することがよく見られる。

その後の定時に来る多くの人、その日



を始める前に、もうすでに一やり取りも二やり取りも行われているのである。こうした時間がある利用者さんは、職員と時間を個別にとることになる。そのことによって落ち着いていたり、職員との信頼関係が強固であったり、自分たちが一日の早い時間から、始まりからいることでの優位性を知らず知らずに手に入れている。職員間、職員と利用者間、利用者間でも相互にはやく出勤しているもの同士として、安定した関係を築き、その関係性を幹にしなが、施設コミュニティの一日の相互作用が始まっている。

### 帰る方向が同じ！ご近所サブシステム

通所・通勤のバスの系統が一緒であると、

その関係は施設到着の何時間も前から始まっている。その関係が終わるのは、施設からの帰宅途上も含むことになる。そのバス内での出来事や困りごとにも共有することになる。知らない人に声をかけられている、バスの座席の事でのトラブルになっているなども起こり、その話が他の利用者さんから聞くことも発生する。異性間のことなど性的被害の話題も、金銭のトラブルも、被害、加害のトラブルもあったりする。状況把握や対策を目的に職員がその途上を一定期間共にすることもある。

近所のお祭り、交通渋滞による遅延、バス運転手の荒い運転、交通事故なども共通の話題にしながらこのサブシステムは相互にやり取りが行われる。「帰り何番に乗る？」という会話から始まり、療育手帳で乗車賃が発生しないという環境がこのサブシステ

ムを維持している。

### **自転車通勤！自転車組サブシステム**

自転車で来る人たちは自転車置き場でのコミュニケーションが存在する。朝の到着時間はそれぞれであるが、作業後は一斉に帰るので、駐輪場でのやり取りが存在する。どのルートで帰るのか？や、一緒に途中までかえるかどうか？のコミュニケーションも行われる。自転車もそれぞれの車体ごとに状況が異なる。整備が行き届いていないため、職員にそのことを伝えてこられることもある。チェーンが外れたり、ブレーキが壊れたり、電灯がつかなくなったり。ここには交通事故のリスクも存在する。そのため、自転車で通うルートは重要である。それでも、一日の仕事から解放されて、自由に移動できる喜びは大きいようで、意気揚々を家に帰る姿も印象的である。

### **一緒に作業！作業場ごとのサブシステム**

作業には持ち場がある。工程ごとや作業種ごとに作業場がわかれている。同じ作業場で一緒に作業をすることで、当然仲間意識が芽生える。たくさんの注文を前に、汗をかきながら一緒に踏ん張ったこと、納期がタイトな中で仕上げたことをお互いに知っている証人 (witness) となっている。そのなかで育まれる信頼関係は強固である。相互の信頼と言える。相手が存在しないとこの仕事、作業が成り立たないのである。これは職員間、職員・利用者間、利用者間

どれにおいてもである。作業における達成感や「われわれ感情」を生み、「私」の存在を認めてくれる場所となる。つまり、その人の居場所となるのである。必要とされる、自分に価値があると思わせてくれる。その意義は言うまでもない。

### **ちょっと一服！灰皿サブシステム**

タバコを吸わない者にとっては、話すきっかけがあるのはうらやましい限りである。吸いながら、リラックスしながら、もしくは煙を肺に入れて高揚をしながらのコミュニケーションは他の場面とは質が異なるのだろう。ここではタバコの貸し借りなどでの行き違いも起こることが多い。また、シケモクを吸わないなどのマナーも必要となる。灰皿のある喫煙所、そこに職員もいることで助かることが多い。共通の話題はタバコ代をどうしているか、たばこの値上げに関する不満を共通の話題にしていることも見受けられる。

### **担当サブシステム**

職員と利用者さんとの間では、まずは二者関係から安定した関係を構築することを大切にしている。困ったらこの人に聞けばということが明確であるためである。その担当ごとに、昼食時に食事をしたり、行事で行動をすることも多く、同じ職員担当のサブグループ (サブシステム) は作られていることも多い。担当意識が強い方もおられる。私はあの職員だと あなたはあの人

でしょ、なのに私の担当の職員とばかり話しているの?というようなやりとりも日常的にみられる。

### 母校が同じ! 出身校サブシステム

特別支援学校ではアフターケアで、卒業生も定期的に母校を訪れ、同じ出身校同士の仲間と出かけていたりする。そのつながりは世代も超えることもあり強いように見えることもある。特に子ども時代からの繋がりは強固である。当然、同窓会の話なども盛り上がる。共通の先生とのつながりもあり、その話題でも盛り上がる。教員は異動で別の支援学校に転勤していることもあり、別の学校で別の世代でも、同じ先生に習っていたりして、思わぬ共通の話題で盛り上がることもある。そんな先生が現役の特別支援学校の生徒の施設実習に来られた時は、利用者さんそれぞれのリアクションが観られる。先生も成人となり働いている姿を感慨深くみて、コミュニケーションをとられる。だれだれ君もいるよ!と先生と話している姿も見る。その方の子ども時代から成人まで、接しさせていただくこの領域の仕事。その仕事のやりがいを感じる瞬間の一つである。

### スポーツ新聞サブシステム

プロ野球ニュース、芸能ニュース、そして少しエッチな記事などが含まれるスポーツ新聞。それをある方が購入する。見せて欲しいとなる。順番に見る、一緒にみる、

もう読んだからあげるともらう。一つの新聞をきっかけに人をつなげることになる。特にペナントレース終盤、高校野球開催時期、大相撲場所中、紅白歌合戦前後、アイドル引退前後など、このスポーツ新聞は大人気となる。世間では多くの人がスマホで済ます中、この現場にいる方々が新聞購読者の一端を担っている。

### 同じ福祉機関を利用しているサブシステム

ショートステイで同じお迎えの車で帰る。そして一緒に泊まる。こんな経験をするとう当然関係は深まりやすい。同じショートステイのスタッフさんの話題、おいしかった、そうでなかったというような食事の話題なども付いてくる。地域での生活、地域福祉、多職種連携がベースになった現代の福祉デザインではこの「同じ福祉機関を利用しているサブシステム」が顕著である。同じグループホームにいる方もいて、作業も生活も一緒になる。それが力になることもある。逆に関係が不調となると、生活場面、仕事場面両方での大きな配慮が求められることになる。

こんなサブシステムを含みながら、施設というコミュニティは存在している。取り上げた多くのサブシステムにおいて、利用者と援助者という立場の分け方を超えている。「社会福祉士は利用者と私的な関係になってはならない」。援助職の代表的な資格、国家資格社会福祉士の行動規範に掲げられている一文である。人が複数いるときに役割機能だけでしか相互の関係性が生じてい

ないというのはあまりにも矮小化された視点であろう。人はコミュニティにおいて、いくつかのサブシステムに身を置くことでそこに居続けることを可能にする。そんなサブシステムの可能性を見つけることは支援のきっかけにもなる。そういえばこないだは男同士というサブシステムで「人を好きになること」をテーマに利用者さんと話をしたところ。やはり面白い職場だ。

## BACK ISSUES

職場づくり 30 2017年9月  
健康管理 29 2017年6月  
音 28 2017年3月  
救世主になりたい援助職 27 2016年12月  
事件について 26 2016年9月  
クルマ社会と福祉政策 25 2016年6月  
施設が求める「障害者像」はあるのか? 24  
2016年3月  
連絡帳 23 2015年12月  
におい 22 2015年9月  
作業着 21 2015年6月

食べる 20 2015年3月  
通勤 19 2014年12月  
クスリの作用、人の作用 18 2014年9月  
倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月  
触れる 16 2014年3月  
対談企画「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月  
情報の格差 15 2013年12月  
20年前のノートから 14 2013年9月  
そうじのねらい 13 2013年6月  
個別化の暗部 12 2013年3月  
グループワークの視点 11 2012年12月  
実習生がやってきた! 10 2012年9月  
月曜日のせいやな 9 2012年6月  
所得を決める福祉職? 8 2012年3月  
世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月  
この現場へのたどり着き方 6 2011年9月  
障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会  
2011年9月  
旅行がない! 5 2011年6月  
職員の脳内回路 4 2011年3月  
たかがガムテープ、されどガムテープ 3  
2010年12月  
利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月  
障害者自立支援法で不景気に! ? 1 2010年6月